

# 常 処 女

## 尾 崎 暢 硯

女

十市皇女、参<sub>ニ</sub>赴<sub>ル</sub>於伊勢神宮時、見<sub>ニ</sub>波多横山巖、吹茨刀自作歌  
河上の齋<sub>ヲ</sub>つ磐群に草生さず常にもがもな常処女にて（万葉集、三）

処

### 一、古代の発想

常

われわれの祖先が農耕を主なる生産手段とするようになったのは  
およそいつ頃か、はっきりした見当はつきかねる。普通には、弥生  
式土器文化の時代に入りかけたあたりからの事であろうとされてい  
る。

水田耕作が上代の生活圏に密着しはじめれば、部族は新しい共同  
体に改編され、感性の形式も一定のわくをもつようになる。而して  
このような農耕社会の成立が五穀敬重の思想を生ずるのは、当然の  
ことである。というのは、古人の思想では、生命力の源である靈魂  
は、人間以外の外物―動植動物・風・光線など―にも宿ることがあ  
り、その威靈をやどすものの中心は生活にゆかりの深い五穀や水で

あると考えられるようになったからである。

武田祐吉博士は曾て、古事記上巻の構成は、祈年祭の思想を中心  
として耕地の選定・播種耕作からはじまって、収穫・新嘗の祭に至  
るまでの一年間の農事曆を神話の形に具象したものであると説かれ  
た。この思想が古事記上巻の内容の骨格をなすばかりでなく、現存  
する他の上代古典のそれについてもほぼ同様の内質の存することを  
見出すのである。それゆえ、古典の記載にはこの思想から出ている  
もののあることを考えねば、その根柢は把握されない場合が多い。  
そこで、このような発想の根柢を考えておくことは、古典を味解す  
る上にぜひとも必要な手続きであるはずである。それは、背後に生  
活共同体の祭祀の習俗を負い持つところの、いわば階層や集団の中  
から生い立ったものであって、上代の発想が近代の個人本位のそれ  
と大きく相違している根本の原因はここにあるのである。

万葉集の作品は、一般には文筆時代に入ってからの個人的創作で  
あると見られている。しかし本当は、このようにみずからの方向を

定位して個の詠歎による発想をととのえてきてからも、伝承時代からの様式を持ち越し、前代の記憶をもととしているものが少なくない。これは、文筆による作品といえども、旧慣を一挙にすて去ることとはできないからである。

## 二、冬 祭 り

古人は、茫洋たる大海のかなたよりこの国に訪れよる常世神はわれわれの生活に好意をよせていて、これを指導し呪祝する霊であるとなした。そういうところから、やがてその霊を祖霊であるとなし、生産生活の側からしては稲霊の神であると考えられるようになっていった。古典の伝えた、いわゆる出雲系の神神のほとんどすべてが穀神である理由は、その活躍の舞台が天界ではなくて現実のこの国土であり、ないしはこの国土と平面的な広がりとの関係にある常世の国であったことに一つの原因があるとされている。それゆえ、一概にはいえないが、稲魂の神としての性格は、本来は出雲系の神神にかかわるものであったらしい。皇室の祖神の性格にも同様に穀神としての方面が存するのであるが、それはおおよそ常世の国の觀念が変化をかさね、純化をとけて、これを天界に想定するようになってから定着されたものであったろう。

いわゆる出雲系の神神の性格の中核をなすものは水の威霊であり、高天が原系のそれは宇宙を遍照する太陽神の光明であり産霊である点に、両者の間にきわだった相違がみとめられる。けれども、ともに農耕生活の印象を核としてその思想は展開したのであった。

穀神に対する祭祀が農業立国の国是としての意味をもつようになれば、豊受の大神が伊勢の外宮の神として奉祀され、国土の守護靈

たる国魂の神は穀霊でもあると考えられるようになる。山上憶良の好去好來の歌にいう大和の国魂は出雲系の靈格であって、古事記に大國御魂の神とあり、崇神紀に倭の大國魂の神とある神である。

この神は国魂の神であるとともに、古事記を見ても知られるように、穀神でもあった。そして、時としては、大國主の神・大物主の神と同一の神であるかのような相貌を呈したりもしているのである。

寒浪の国つみ神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも(三)

右の歌にいう「国つみ神」は、国魂の神というにほぼ同じである。ところで、ここにささなみの地の荒廢はその地の国つみ神の荒怠のゆえであると歌っているのは、稲魂の神の去就がその地の栄枯を決するとなす思想によっているのであらう。「うらさぶ」のサブは「一方では靈魂が遊離した状態を示し、他方では正反対に、靈魂が附着し充実した有様を等しくさぶと云っているところを見ると、さぶは本来、靈魂の移動乃至は作用を示す語であったものが、生活感情が複雑になり、これを緻密に区別する必要が生じて、一語でありながら全く逆な、二様の用法が考えられたのであらう」(刀葉集研究 第七号 柳井巳西郎氏)。

新嘗のときに行なわれる田遊びも、稲魂の信仰を抜きにしては考えられない。延喜式卷第七、踐祚大嘗祭の条に「御主基帳。供御膳之後、奏田舞」とあるのも、このことを語っている。田舞は田遊びが散楽と結びついて雅楽化したもので、天智天皇紀十年五月の記事が史書における初見である。続日本紀天平十五年五月五日の条などにも、皇太子すなわち後の孝謙天皇が五節を舞われた記事がある。これらは時期が大分ずれて夏に行われた例であるが、続紀天平十四年正月十六日の条などで見ると、田舞と五節は春正月に行なわ

れているから、この場合などは古義を存している例であらう。

太陽の衰弱は冬至にきわまり、以後は昼が少しずつ長くなってその栄光を恢復する。上代人にとっては、冬はみ霊のふゆ（殖ゆ・触ゆ・冬）の呪儀の実修される時であり、春の到来の間近きを思わせる時であった。「ひじり」の語については、われわれの理會に格別の遺漏もないように見えるところから、安易に説かれてくるようである。けれども、本来は農耕のための曆の知識を有し、これに關する指導力を有する神人を意味する語であつて、こうして算まれた曆日が日よみ、すなわちこよみなのであつた。そして朝命を奉じて大和朝廷の宗教とこれにかかわる曆の知識を傳播した部曲が日置部であり、日奉部であつた。

女  
天の岩戸の神話は、祈年祭の思想にもとずいて太陽の復活・天子の威靈の更新・耕作の開始に至るまでの準備となされる祭儀の由来を説いたものである。古典では、この一条が天孫降臨の章に先行する所以である。

常  
ト部氏の氏文たる新撰龜相記には、古事記の記事を引いて、鎮魂祭は天の岩戸における神々の事蹟に由来すると説いている。ト部氏は海人部から出て神祇官に仕え、ト占のことも關与するようになった。折口信夫博士によれば（註）、ト部は八幡信仰に關係が深く、その占法には陰陽道の方式が加わつてゐるという。ト部や物部がト占に關与するようになった理由は、おおよそ察せられる。

天皇の登極は、太陽神・穀神たる天照大神が歴史的に復活された姿にはかならない。万葉集の柿本人麿の、日並皇子の尊の殯宮の時の歌や、高市皇子の尊の殯宮の時の歌において、天照大神・天武天皇・日並皇子・高市皇子の事蹟の境界が分明でなく、これを混淆し

て説いた観のあるのは、作品が抒情詩の領域を見出す途上で、このような信仰的なものの支配力がなおそこに残つてゐるためである。それゆゑ、抒情詩の完成のためには、そうした呪の力はみずからの詩的構想力によつて揚棄されねばならない。

続日本紀、神龜元年二月四日の条にみえる聖武天皇即位の宣命などにしても——宣命は本質的にはのり、と別物でなく、のりから出て目的や表現法が分れたものである——今日の常識からは理會されない点がある。文武・元明・元正の三帝のうち、どなたのことを述べたのか区別しかねる部分のあるなどはこれであつて、右の例では時間の觀念と個人の区別を没却して説いたため、この結果を見るに至つたものと考えられる。かくのごとくであるから、理を推してゆくだけでは、依然として解決されない部分は残るのである。

書紀では、即位・立后・立太子のことに触れた記載のほとんどすべてが、溯つて古い時代——神武天皇に近い時代——になるにつれて、春正月の条に配せられる傾向にある。思うに、かような結果を見るに至つたのは偶然ではない。それは、天地開闢・国初の時——古人の信仰ではその時期は新春であつた——にあつたことは、いずれの皇祖神・祖宗の御一代にもあつたことであるとされたからである。つまり、右の記事など、太古に一たびあつたと信ぜられたことは御代ごとに何度でも繰返されたことを反映しているといえる。古典に類型の記事が頻出し、またしばしば祖神と後裔との事蹟・その行なわれた時処の区分が明らかでないのは、一つにはこのような原発想の様式が残つたためである。しかるに、時運の変遷にともない、いわゆる伝承的事実と史実とは区別されるようになった。いうまでもなく、かような形において伝えられた上古の物語は信仰をも

ととしてゐる。従つて、それは歴史的事実などではありえない。けれども、それが自然界の理法と人間の生活との結びつき、これに関する古代の心意を具象しているという点からすれば、民族の生活にとつては、むしろ断片的で偶発的な個々の史実よりも重い意義を有するといつて差支えのないはずのものである。

### 三、關添加美の神

神代の神々で、その御名によつて農耕神・穀神であることの知られる例は、きわめて多い。それらの神々は、同時に支配者・統治者であつた。換言すれば、支配者・統治者であるためには、穀霊を左右する力をもつた神人でなければならなかつた。

古代の伝承では、神名はその神の事蹟・物語を内包してゐた。つまり、「註二」神名を提示すること即ち神話を語つてゐることであつたのである。かような傾向は下つて人皇の世になれば漸減するが、それとて絶無ではない。今ころろみに、歴代天皇の尊称ないし諱でこれに相当するものを拾つてみると次の様な例が見出される。

彦火火（穗々）、出見の尊（神武）

大日本彦耜友の天皇（懿徳）

觀松彦香殖稻の天皇（孝昭）

去來種別の天皇（履中）

豐御食炊屋姫の天皇（推古）

このほかに、間接に穀霊の信仰に関係があると思われるものに、

瑞齒別の天皇（反正）

淳中倉太玉敷の天皇（敏達）

橘の豊日の天皇（用明）

息長足、日広額の天皇（舒明）

天豊財重、足姫の天皇（皇極、斉明）

天万豊日の天皇（孝徳）

日本根子天津御代豊国成姫の天皇（元明）

天璽国押開豊松彦の天皇（聖武）

のごときがある。これらの尊称または諱のうち、瑞齒別の天皇と淳中倉太玉敷の天皇の御称については説明を要するであらう。

前者については、書紀の即位前紀に「瑞齒別の天皇は……生れながらにして齒は一つの骨の如く、容姿美麗しかりき。ここに井ありて瑞の井と曰ふ。汲みて太子に洗あしまつりし時に、多遲の花、井の中にありき。因りて太子の御名と為しき。多遲の花は今の虎杖の花なり」とあつて、御名の由来については優に美しい物語を伝えている。然し、これなど、当代風の歴史観による合理化の加わつた説明にすぎない。反正紀ではタヂヒは虎杖の花の事であるとしてゐるが、一方では毒蛇の意にも解せられていた。仁徳記に螻之水齒別命と書かれてゐるのは、このことを語つてゐる。いづつ、上代の文章には発想の省略が多い。また、一語で多義を併せ有するものが多い。これは、一つには、集団の予備知識に依存して発唱者・作者の方ではこれを省き、またその連想・類推を自由にひろげて行つたからである。われわれの理會を困難にする原因の一つは、ここにあつた。多遲が花の名であると思はれることとそれがそれである。花を穀霊の象徴とする思想の存したと思はれることがそれである。多遲を花の名とせず、「螻」のこととみても、ほぼ同様のことがいえる。なぜかなら、タヂヒは、古人の観想の上では蛇靈でもあつたのだから、いづれの方面からするも、右の書紀の伝えは穀霊の信仰

とかかわってくるはずであった。かように、語義の重複して考えられ、説かれる根本の原因があればこそ、嬢の文字をもって記されたりもしたのであった。

天皇の威靈復活の式と新嘗・聖水の信仰とが不可分のかかわり有するとされたことは、たとえば康治の大臣の寿詞に「天つ水」のことに触れた部分や江記の大嘗祭の蝦鱈えびたの船の記事によって知られる。江家次第鈔第七月の条にも「采女氏稱」(警蹕)。先供御手水。(内裏式云主水供御手水者身今儀異之賦。其始之儀八姫宮主相從執一竹杖一傘上參入向北別。一姫留候之。)八姫之中一人相分共昇海老鱈船置御前短畳之上。

## 女

取之如先、開其蓋置畢。次取水部所持多之良加授姫退候三戸外御手水供畢。主水連水御座退。下三沃為限。姫取巾献天皇」と記されている。然し、此らは後代のもので、間接資料にすぎないという意見もあろう。

## 常

そこで、その列証としてわたくしは日並皇子の尊の殯宮の時柿木人麿の作った歌をあげてみたい。この歌に「わが大王 皇子の命の天の下 知らしめしせば 春花の 貴からむと 望月の 満はしけむと 天の下 四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天つ水 仰ぎて待つに … (二念) とあるのは、この小論にとって重要である。と

いうのは、筆者の見るところではこの歌にいう天つ水は単なる枕詞でなく、「をちかへり」の霊水の信仰の印象を遺存した語であると思われるからである。家持の歌に見える「天つ水」(三三三)の用語例に至ってはその痕跡はきわめてかすかではあるが、これにすらそのおもかげは見えるのである。

瑞齒別の天皇のミヅハは嬢の齒並みの特色をえがいているとともに、それは弥都波能売の神(記、神代)、嚴岡象女(神武紀)などの

ミヅハと同語で、水神の名であろうと思われる。ミヅハノメが水の神女であることは神武紀に、水の名を嚴の岡象女となすとあるのによつて明らかである。しかし、ミヅハノメの称は、もと貴人の子女の誕生の際に産湯を使わせる女性をさしたものであるらしく、それが後に神格化されたものようである。つまり、その職掌が神秘のものとして観ぜられたところから、その産湯のことにあずかる女性は妖怪何かのように考えられるようになり、岡象女などの字をあて書かれるまでになつた次第であらう。

次に、淳中倉太玉敷の天皇の御称について一言しよう。朝日古典全書、日本書紀第四冊の頭注には「ヌナクラ、清水の谷間。神功皇后紀に、大津の淳名倉の長峽の地名がある。(中略)。清らかな水の谷に見事な珠が敷き満ちてある意」とある。いかにも、書紀の成立した頃にはそういう解釈がなされていたであらう。しかし、本来的にはこのヌナクラ(註三沼名河(方葉三三三)・淳名井(神代紀、一書・淳浪田)尙也)はその類縁の語。又は瓊、転じて神靈・神聖も、神靈の溪谷の義で、そこは閻波加美の神のいます所であらう。そして閻

齋・閻岡象(紀、卷第)も、添加美の神の族類なのであらう。

以上のように見えてくれば、天皇や皇太子等の尊貴に對して有力氏族の子女が酒食を献ずる語りの意味するところが理會されよう。この場合、主賓たる貴人は常世のまればと・穀神としての資格で祭のにわに臨むのが古義であった。そして、これを饗應する女性は巫女としての立場でこれに奉仕するのであった。古典に、多くの女性が貴人の接待役として、また一夜妻として登場する所以である。それはまた、靈信仰を背景とする多くの神話・説話が性愛に關連して説かれる所以でもある。

#### 四、吹矢の刀自の歌

國つ神大山津見の神の女、木の花の佐久夜毘売は年殺の兆たる桜花の精霊であつて、従つてまた酒食の神としての方面の性格を有せられた方である。神代紀の一書に姫が御子を生まれる条に、「時に竹刀以ちてその児の臍を截る。…時に神吾田鹿葦津姫(佐久夜毘売)卜定田を号けて狭名田と曰ひ、その田の稲以ちて天の甜酒を醸みて嘗しき。また淳浪田の稲用ちて飯に為して嘗しき」とあるのは、よくこの間の事情を示している。しかもまた、この姫は水界の神女としての性格までも有せられていたらしい。つまり、一種の「水依比売」(開化記)であつたらしい。古事記に「天つ日高日子番の邇々芸の命、笠沙の御前に麗き美人に遇ひたまひき」とあつて、その美人は「大山津見の神の女、名は神阿多都比売。またの名は木の花の佐久夜毘売とまをす」方であつたとあり、書記卷第二の一書には

女

「皇孫因りて宮殿を立て、ここに遊息みまます。後海辺に遊幸ましととひたまふ。対へて曰さく、『妾は大山祇の神の子、名は神吾田鹿葦津姫、またの名は木の花の開耶姫』とまをす」とあり、また第六の一書に、その少女は「秀起つる波の穂の上に、八尋殿を起てて、手玉も玲瓏に経織」つていたとあるのは、このことを語っている。

常

かように、大山津見の神の女が水界の女性であつた理由は別に考えねばならないが、今は岐路に入るので、これに及ばない。わたくしは、ここで桜花の精と水の霊とが関連して考えられた痕跡がこの姫の名義および事蹟に見られることを指摘するにとどめねばならないが、履中紀三年の若桜の宮の段に見える皇妃の性格にもこの思想の

看取されること、その物語の場も水辺であつたこと、この二点を付記しておきたい。

木の花の佐久夜毘売が天孫と婚姻される語りは、かような古代の信仰生活の印象を根柢として成立したものであつた。允恭紀にみえる「花ぐはし桜のめで…」の歌なども、佐久夜毘売についての語りの場合とは、その境遇なり製作事情なりに相違はあつても、畢竟、発想の基盤は同じものであつた。「花ぐはし桜のめで…」の歌が、允恭帝が井の傍の桜の花を見そなわして歌われたものであると説かれた所以である。而して允恭天皇と衣通郎姫との交渉の記事は、春二月の条に配せられている。これは桜花が春のものだからでもあるが、主として事を叙するに歴史観を以てする書記編纂の立場に由来しているであろう。それでも、一面からいえば、それが春二月のことであつたとしているのは、農事の時節に関連しているからであつた。

古代では社会組織が単純で生活も単調であつたから、人間が性的に充足された瞬間は生命の最高度に高揚された時であつたにちがいない。「をとめ・をとこ」(五七)「ヨミナ・ヲノコ」とは意味も語の構造もちがうなる語の原意は、神の認証のもとに新生をとげた男女の意であつた。しかし、万葉も末期になれば乎等古・乎美奈奈三三などの用語例もあらわれるようになるし、倭姫命世記には未嫁レ夫童女と書いた例すら見えている。これらは、ふとしてはヲトメとヨミナの区別を忘れるまでに信仰心が薄れてきたことを語っているのである。(近時、(註四) 小畑喜一郎氏も、男浅津間若子宿禰の命・館の若子・毛津の若子・中臣部の若子・久米の稚子等のワクゴのワクは動詞「変若つ」とも同源の語で、「わく」をつはまた、常若

## 女 処

の司祭者とされる(同一人格の連続)、を、と、こ、を、と、め、の、を、と、にも一線を通ずるものであり」「若子といえ、音の響きに応ずるように死が語られ諧われねばならなかったというのも、…死霊的存在態として観想受容された小さ子(侏儒)以来の伝統に従ったままで、それ自体は八伝承的事実Vであつた」とし、小さ子と水とは信仰上、絶ちがたい所縁が存するといわれている。つまり、原意的にはヲトメ・ヲトコは少年少女期を終えて「若者」として変若ちかへつた人人を讚美する考えかたに裏づけられた呼称であつた。新嘗の夜に巫女が神の妻となつた習俗は、かような古代的思考の論理構造にねざしてゐた。別言すれば、それは、人間の霊と肉の未分離・再生復活の可能の因子は自然界の生死―自然の変移・季節の循環―と即融し、人間の生命を支配する理法は同時に自然界にも存在すると信ぜられたことによる。

壬申の乱のち、傷心の十市の皇女が伊勢の神宮に参拝した時、吹矢の刀自の作つた歌は、万葉集を読むほどの人なら誰でも知っている。そして(註五)「巖石が永遠を思わせることは、古くより人人の感じたことでも」もある。けれども、この歌の場が水辺であることと「常にもがもな常処女にて」と歌われねばならなかつた事情とに注意する人は少ない。

古典でヲトメ・ヲトコの語が併称される場合は、農業祭に関連していることが多い。そして、その農事の祭の場は水に接したところであることが多い。

常陸の国風土記、香島郡童子女の松原の条には、囀歌の会に那賀の寒田の郎子と海上の安是の嬢子とが相逢つて契つたことをのべ、その「年少童子」を俗に「加未乃乎止古・加未乃乎止売」といった

と記しているなどは、これである。「神のをとこ」「神のをとめ」の呼称は、この兩名の「年少童子」の言問いが農業祭に根柢を有する集楽の場においてなされたことにもとずくであろう。囀歌や歌垣が一種の農業祭から出発して遊楽化した行事であることは、いうまでもない。統紀、宝龜元年三月、由義の宮での歌垣の条にみえる歌や、高橋虫鷹が筑波の囀歌会のとくに作つた歌(万葉集、一五〇)の中にみえる「をとめ・をとこ」の用語例、伊勢の国風土記逸文(岩波文庫風土記、三三頁)や高橋氏文にみえるそれなども、同様に広義の農業祭に関連して用いられている点に注意される。

もともと、ヲトメ・ヲトコのヲトは「わたつみ」のワタとも同根の語であつて、そのわたつみを神代紀に「少童」、神武天皇即位前紀に「海童」と記し、万葉集に「海若」(三三七・三六・一七四・三三九・三八〇)と書いているごときも、このことを傍証している。海童・少童・海若の字の典拠について今井宇三郎博士に教示を乞うたところ、博士は、海若の字は楚辞の遠遊、文選の西京賦(張衡)・達莊論(阮籍)・望水詩(鮑照)等にみえていて、楚辞の注に「海若、海神名也」とあり、海童の字は同じく文選の海賦(木華)などに見え、注に「馬衡、海童、並海中神怪」とあるが、少童の字については出所を知らないと告げられた。楚辞や文選の用字意識を支配した海神についての観想がいかなるものであるにせよ、書紀や万葉集にこの文字の見えるのは、生命の更新と水の信仰との思想的関連がこの熟字の使用を容易にしたからであろう。

すでに近江の都はほろび、十市の皇女の背の君弘文天皇も敗死せられた。従つて、この皇女の上に伊勢の大神の恩頼はあつても、もはや「変若女」となられる境遇にはなかつた。それにもかかわらず

女 処 常

—むしろ、それゆえにこそ—この歌の作者は、常にもがもな常処女にてと願わずにはいられなかつたわけなのであろう。何よりも、時代の情勢がそういう時点にさしかかつていた事が察せられる。このことは、今一步を進めていえば、「をとめ」に対する呪的信仰の基礎はずでに失なわれつつあったことを意味するであらう。三十数回にわたる持統女帝の吉野行幸や、元正女帝の美濃の国多度山の美景—「老い人の変若つといふ水」(三三〇四)—への行幸などに至っては、殊に這般の事情と時代の動向を裏書きするものようである。こうして、古代国家機構の整備・政情の複雑化・大陸よりする文化や思想の影響は、従来の民俗信仰を否定する方向にみちびいてゆく。

文学史家は、普通に飛鳥藤原朝あたりをもつてようやく作品に個性の発現を見るに至る時代であるとなしている。いかにも「河上の齋つ磐村に……」の歌に内在するものは、まぎれもなく記紀歌謡あたりのそれとは等質でなくなっている。すなわち、そこでは従来の呪の世界のものを内部にとりこみつつも、一面ではその繫縛から離れて転生しようとする方向—いわゆる初期万葉の作品から区別される感動の集中化・主題の明確化・無技巧ともみえる技巧の方法—を見出してきていることが知られる。この歌に見られる、人間の生命の恒常でないことに対する自覚となげき—それはなお、神さびた清浄感につつまれて犯しがたい品位を保ってはいるが—は、そういう作品的内的変質の過程で見出されたものと考えられる。

註一 日本芸能史ノート、二九頁

註二 国文学、昭三五、二月、高木市之助博士「記紀の文芸性」

註三 延喜式神名帳、越後の国頸城郡の条には「奴奈川神社」があり、倭名鈔巻七、越後の国頸城郡の条にも「沼川」があり

奴乃加波と訓註されている。

註四 伝承文学研究第二号、「若子伝承をめぐって」

註五 佐々木博士、評釈万葉集

古代文学 II

万葉山柿考……………市村 宏

「万葉集古義」の前身……………鴻巣 隼雄

古代和歌に於ける継承

緒方惟精・阿蘇瑞枝・賀古明・戸谷高明・江野沢淑子・中西進・町方 和夫・鈴木正彦

六帖両著に於ける万葉集……………前野 貞男

羅雀記……………神田 秀夫

家持の越中守時代……………伊原 昭

——特に色彩関係の用語について——

萩 祭……………川口 常孝

——旅人追想——

旅人追想……………川口 常孝